

の庭を去り、親愛なる諸君と袂を分けたねばならん様になりました。

山縣孝孺が

休唱陽關三疊詞

陽關三疊不勝悲

送君多馬河邊柳

折自南枝至北枝

とて、友と別れを惜しんだのも、島崎藤村が。

恨は友の別れより、さらに長きはなかるらむ。

又

さらば名残はつきすとも

袂を分つ夕まぐれ

見よ影深き欄干に

煙をふくむ藤の花

北行く雁は大空の

霞に沈み鳴きかへり

彩なす雲も愁ひつゝ、

君を送るに似たりけり。

ああいつかまた相逢うて

もとの契をあたゝめむ

すでに柳は深みざり

人はあかねど行く春を

いつまでこゝに留むべき

我に惜しむな家づとの

一枝の筆の花の色香を。

とて友の別れを惜んだのも、今は吾身にふりかゝつてきました。請ひ願くば彦根中學校の諸君よ、拙者

の云ふ眞の元氣を涵養せられて、飽迄も元氣に活潑に而も愉快に勉學せられ、社會より「彼は立派な學生である、何となれば彼は元氣溢るる彦中の生徒なればなり」と云はるゝ様にせられん事を。諸君よ幸に健全なれいざさらば終り。

音樂の獎勵

第五學年甲組

渡邊勝已

世の學生間に、神經衰弱と云ふ、實に不幸なる病あり。而して其の病の根本原因即ちその始りは、神經過敏なる物となりて、現るゝなり故に、余は如斯不幸なる學生の爲に神經衰弱の音樂的療法と云ふ治療法を聊か述べて以て音樂を獎勵せんぞとす。

凡そ宇宙間の人類動植物即ちすべての生物に、最も多く感動を與ふる物は、實に音なり見よ、曠野にありて彈丸一發巨砲の音する時は、此を聞ける全動物は、すは、人間と云ふ惡魔の來襲ぞ。やよ子等よ出るなど、親の警戒に、生れて僅か三日を経たる仔獸迄、恐れおののきて逃げ走る、あゝ一發の音にさへ如斯の威力あり然るに數百の勢子に追はるゝ山兎にありては如何なる感あるらん。

然し、此等は、何れも惡魔の報なればなり。されど規律正しき樂音、音樂に於ては猶一層その他に及ばす力の大なるものなり。「古佛國にヴァイオリンスト、エムラアカアローと云へる人ありき。氏の印度に遊覽せる時、ふと大原野に出でたり。折しも其處を通りかゝりし猛獅、早くも彼を見つけて迫り來る

氏は絶對絶命と思ひしも、足の續く限りはと逃げ出したり。幸か不幸か、彼は哀れにも、獅子を取る爲の落穴に落ちたり。獅子も思はず同穴にはまりたるなり。彼は進退此に谷まれりと斷念したれども、せめて最後の一曲をと思ひ、手にせるヴァイオリンにて、日頃研究せし秘曲を奏せしに、今將に飛びかゝりて食はんとせる猛獅子は、彼の手より出するあまりの妙音に、開きし口も閉ぢられて、遂に垂涎三尺の姿となり首を低れてき、惚れたり。彼は其と見るより懷中にせし短刀抜く手も見せず飛びかかつて一刀の下にかの猛獅子を斃しぬ。」と實に情に乏しき猛獸にありてさへ斯の如し。況ん萬情一も缺くるなき人間にありては、如何なるべき。

寒月皎々と照りまさる冬の夜に、遠く鳴く犬の聲の相に、按摩の笛等聞く時は、如何に寂寥を加ふらん身に襤褸を纏ひ、破れ皮の三絃手に持ちて辻に立ち糊口の料を乞ふ乞食よりも、一層の憐れを催さざるを得ざるなり。實に此等は、音よりうくる大なる感の人をうごかすものあればなり。又臆げなる月山の端を離るゝ頃何處よりともなく垣、洩るゝを聞かば如何に。小波打ち寄する岩邊に腰うち下して琵琶を手にして月の東山に登るを待つ徒然にまかせ、名もなき曲とは云ひ乍ら、かきならすを聞いては、實に九腸寸斷の慨おらしむるなり。又戰場に進軍ラッパを吹くは何故か、又解纜し正に拔錨し敵國に向ふ軍艦に行進マーチを奏するは何故か。一度戰場に立ち進軍ラッパを聞く時は、我を忘れて突撃すとは戦歸りの戰士のひとしく語る所なり。又戦艦に打ち乗り、出船するに際し、親しき故郷故國を思はざる者誰かある。然るを行進マーチは血湧き肉躍るの感起り、故國を離れて潔く名譽の戦死をとぐるも亦、此あるに非ずや。實に音樂てふものは時には世の背景となり、又之を飾り聞く者をして、或る時は涙の人とな

し、或は血の人ともなし、時には肉の人ともなすなり。活動寫真に洋典を奏するも亦然り。見る者をして畫中の者たらしめ情無き一葉の白壁に對して涙を落さすも實に音樂に非ずや、されば吾人の些たる事に興奮し魚の死せしを見ては世を果敢なみ落涙し悲しみ嗟嘆し悼悼する者等、何れも神經過敏の病人ならざるはなし。神經過敏の調高まりて、よしなきふしにかゝすらひて身を瀧壺の中に投じ、淺間の噴火口に投入する等の如く、自らを自分を輕視し、蔑視して親譲りの大切なる身命を棄つるが如き輩は、宜しく一時一刻も早く、余の主張する音樂を心得おき、一刻も早く元氣の恢復し、天真爛漫、自然を友として、おのづから大人物となり大いに世に貢獻せられし事を。(丁)

賢愚果して孰れぞ

第五學年乙組

松川 武吉

將來の成功を期待せる人は、常に人生の大奮闘に備ふる所なかるべからず。勝利のために自己を訓練せざるべからず。

名譽の優勝旗を爭ふ端艇、野球、角力、庭球等の選手は、母校の爲に毎年春秋の二季を犠牲として、大いに技倆を練磨するにあらずや。殊にボートマンにありては、好める食物をも絶ち、口にするものは唯僅かに筋肉となり、筋力となるものに限り、且つ起居、飲食、睡眠、練習等の規定、及び時間を嚴守せざる可からず。斯くの如きこと數週にして、初めて最大限の筋力、活動力、耐久力を貯ふる事を得るなり。

然らば、かく起居飲食の不自由を忍びて体力を練磨する目的、果して那邊にあるか。

無経験家或ひは曰はん、「瑣々たる名譽のために數週間自己を犠牲にするの要あらんや、千辛萬苦以つて貯へ得たる力が、僅か五分にも足らざる奮闘のために用ひらるゝにすぎずとせば、所謂体育の効も亦小ならずや」と。

然り夫れ或ひは然らん。されど余は斷言す、激烈なる生存競争、吾等の近き將來に於いて、必らず遭遇せざるべからざる此の生存競争に於いて、成功の榮冠を最も實力あり最も素養ある青年の手に歸着するもの、且つその實力と素養の修得に要する努力の原動力は、偏に体力の健康にありとせば、彼等の言は即ち先見の明なき讒言にして、愚の至りと謂はざるを得ず。

限りなき名利の慾を制し兼ねて、愈々多く望み、法外なる野心の刺戟より来る過度の勉學、睡眠、運動等の不足に因りて、只管腦力を消耗し、体力を消費して、十分の静養を與へざる時は、終ひには意外の病に罹り、幸にして命を拾ふとも、舊体に復する迄には、尙數年の長年月を要すること少なしとせず。腦力及び体力が衰弱して再び用をなさざるに至る迄、汲々として働くは愚の極と謂はざる可からず。時に吾等は青年の嘆聲を聞く曰く、「斯くの如く數年間刻苦勉勵して中學校を卒へて何の益がある、數年間代數、幾何、三角、英語、物理、化學等に苦しみて何の効果がある、數學の原則、物理の定律、化學の方程式、英語の智識を活用するもの果して幾人かある」と。これ腦力に對して、前者と同一の誤解を有する者にして、又至愚なりと云はざるを得ず。若し青年にして、その智力の啓發に注意するにあらざれば、又一方に精神の浪費を慎みて体力を保存し進んでこれを増進するにあらざれば、如何なる大望、

如何なる意志の力を以つてするも失敗は免れ得ざるべし。

自然は決して依怙あるものにあらず。勤勉なるものには成功を與へ、怠惰なるものは失敗の淵に蹴落すべしと雖も、睡眠の不足、運動の不足、食事の不規律も又許す所にあらず、如何にその志は賞すべきも些の斟酌をもすることなし。口實と辯解とは自然に對して無益なり。人若し自然の法則を犯さば直ちに其の刑罰を受けざる可からず。

馬車の兩輪に油を注ぐにあらざれば日々の旅行を始むべからず。毎朝工場の器械は悉く故障を取り拂ふまでは運轉すべからざるものと、知れる人、動もすれば、造物主の作りたる至大至妙なる機關に就いては、極めて無頓着にして、幾多の故障あるも、之を等閑に附し、適宜に油を注がす、十分に燃料をも供給せず、以つて無暗に使用せんとす、姑息的に油を注ぐ時は、器械は直ちに破損すべし。故障ある器械は常に意の如く運轉せざるのみならず、又之を放任すれば遂に修繕にも堪へざるに至るべきは、何人も能く知る所なりと雖も、腦髓の細胞は睡眠、保養、休息等に依りて疲勞を恢復せすとも運轉を繼續して完全なる仕事を期待し得べしと思惟せり。矛盾も亦甚しと謂ふべし。十分なる睡眠と、戶外運動、特に學生時代に於いて、体力を練磨する事は、機械に油を注ぐと同様に、極めて必要なものなり。……換言すれば、自然的の體力保養にして是なくば、長期の活動、殊に腦力の活動は到底不可能なり。嗚呼須らく壯健なるべし、中年に至るも、老年に至るも、青春時代に於けるが如くにすべての神經纖維に躍るが如き活動なるか可からず。青々たる綠野牧場に、小羊、小牛の戯れるが如く、生存を楽しむべく、洋々たる海洋に一葉の舟を浮べて、渡世をなす漁夫の如く、凜冽たる北風に身を露はして氷上を滑る少

年の如く、嬉々として單純なる學生生活を楽しみ、以つて強健なる体力を養成せざる可からず、以つて智力の増進を計らざるべからず。斯くの如くするものこそ眞に賢なる者にして將來の成業も又期して待つべき者なりと叫ばざるを得ず。

武道に就き愚見を述ぶ

第五學年乙組 藤村小次郎

余此度武道に就きて吾が校友會雜誌々上に愚見を述ぶ。余幸にして落第せずんば、此れ余が在學中に於ける本會誌上への投稿は、最初にして同時にまた最後なり。余固より文は拙、思想は卑云はんと欲するところ悉く之れを述ぶる能はず。然れども賢明なる讀者諸君にして、能く推察以て讀まれんか、余が微意を傳へん事も、蓋し難からざるべし。今以下數項に分ちて余が武道に關する持論を直書す。乞ふ幸ひに讀せられん事を。

一、武道の今昔

抑々武道なるものは、我國獨特の意義崇高なる深遠なる武藝にして、その起源は遠く亂世戰國の際にあり。封建時代には時勢の要求に應じて盛んに行はれしが、明治維新以後は一時全く中絶して、世人の顧るものなく殆ど將に消滅せんとせり。

然れども國內漸く整ひ四海靜謐なるに及び、一部智識階級の人士間に、武道の必要を唱ふるものあるに至り、次第に盛大となりて、遂に今日に至れり。

今や武道は國中一人のその必要を否認するものなく、全國中等學校の正課に加へられ、益々盛大發達せんとしつつあり。之れまことに國家の慶事、吾人の齊しく謳歌する所なり。然れ共僅かに体操科の科目たるに過ぎざるを恨む。願はくは百尺竿頭一步を進めて、特別の名稱ある獨立の科目となし、生徒心身修養上に一大權威たらしめん事を。

二、武道の目的

武道の目的に關しては種々の説あり。曰く殺人説、曰く護身説、曰く心身練磨説等也。余の淺學徒らに先學大家の諸説を評するに足らずと雖も、余思ふに前者は何れも武道の目的としては餘りに偏狹なり。之れ等の諸説を綜合したる者こそ完全なる武道の目的なり。

如何とすれば、現今大正の聖代に於ては、心身練磨その重きをなし、剛健なる身体と豪壯なる心膽とを養成すべきは、方今の急務にして、殺人護身の要は殆んど之れ無しと雖も、一朝非常の場合に遭遇せんか、臨機應變、或ひは殺人、或ひは護身の用に供せざるべからざればなり。

三、武道の名稱

現今一般に柔道劍道を總稱して武術と稱す。然れ共余は敢て武術と言はずして武道と稱す。その故は術

とは唯、技術のみを意味し、道とは技術に加ふるに道徳的意義を以てす。斯の如く術と道とはその義を自ら異にす。故に剣道と柔道との總稱は、當に武道と稱せらるべきなり。余その名稱につきて論ずる事斯の如きは他なし、名稱の精神上に及ぼす影響や、實に大にして決して忽にすべからざればなり。若しそれ諸先生及び生徒諸君にして余と其の感を同じうせられんか、吾校武術部の如きも宜しく速かに武道部と改名すべきなり。

四、剣道と柔道との優劣につきて

剣道と柔道との優劣に至りては、之れ固より論外にあり。何れを優となし、何れを劣となすも不可なり。故に余は剣柔兩道を修むるを可とす。此の兩道の吾人が精神上に及ぼす影響は同一なれど、技術の効力及び吾人が身体の發育に及ぼす効力に至りては、互にその部分を異にするが故に、兩道を並修して始めてその長短相補ひ相助けて茲に完全に武道の目的を達し得るものにして、恰かも彼の兩輪の如くその何れを缺くもその用を爲さざればなり。

然るに現今我校に於ては、三學年以下は兩道を學ぶを得るも四學年以上に至りては學校より當人の好惡を問はずして、強制的に剣柔道の中何れが一つを指定せられ、兩道を學ぶを許されず。而かも一週間に僅に一時間の指南を受くるのみ。之れ余を始めとして好道の士の齊しく遺憾とする所なり。出來得べくんば四學年以上も三學年以下と同じく剣柔兩道を修めしめ、少くとも一週間に一時間づゝは指南せられん事を。

尙ほ他校にては何れも技術の巧拙によりて級を定め、武道獎勵の一手段となせるに吾校にては未だ此の手段を採用せられざるは何故ぞや。余の如きは其の了解に苦しむなり。願はくば吾校武道獎勵のため、是非とも生徒の品行と技の巧拙とによりて、級を定むるの制を採られん事を。

五、武道の試合と勝敗

余武道を學び初めてより茲に七年、大小試合に出演せし事三十回に下らず。時に不幸にして試合に敗れたる事なり。その都度常に無念の餘り人知れず暗涙に咽ぶ。他の敗者も多くは余と同じく、蔭に暗涙を零して次回には必ず勝つべしとの臍を固めざるはなし。然るに往々にして目も當てられざる慘々の敗を取り、毫も殘念恥辱とする色もなく平然たる者あるは何ぞや。斯の如き輩その理由を問へば則ち必ず答へて曰く、「勝敗は時の運なり。勝敗の如きは念頭に無し」と。一應尤もらしく且如何にも思ひ切りよき眞の勇者の如きも、之れ他人の慰撫或は獎勵の言を誤解せるものにして、人の「勝敗は時の運なり」といふは、蓋し敗者を憐みて發する慰撫の言なり。また「勝敗は念頭に置くべからず。」或は「勝敗は論するに足らず」等いふは蓋し勝敗を重んずるの餘り卑怯未練の行動に出づるを戒め、且つ勵まして全力を注がしめんが爲めなり。然るに之を誤解して妄りに前者の如き言を吐き、敗れても尙ほ平然たるは愚も亦甚だしきもの、試合に關して勝敗なるものはその目的の主なるものにして、大いに念頭に置くべきものなり。何ぞ念頭に置かすして可ならんや。必ず勝たずんば已まざるの精神は、日本男子の本領なり。西人ならばいざ知らず、わが日本男子たるもの何事にもあれ豈に人に後れを取つて可ならんや。日本魂と

は畢竟正義の爲めに生死を顧みず、奮闘するの負けじ魂なり。この負けじ魂なきものは日本魂なきもの日本男子の風上にも置けぬ腰抜けなり。斯の如き弱蟲日日にその數を増さんか、我が日本の將來唯亡國あるのみ。好道の士よ、願くば大いにこの負けじ魂を養はれん事を。

明治天皇の御製、

如何ならむ事にあひても挽まぬは

わが敷島のやまとだまし。

六、武道稽古の心得

武道稽古の心得に關しては、我校道場の、壁間に掲げられたる武道修業者心得を嚴守せば蓋し大過なからむ。

然れ共余の常に甚だ遺憾とする所のものは、近年武道隆盛となりしに伴ひ、その技術的方面は大いに發達せしかど精神的方面に至りては、未だ十分なるを見ず。

即ち稽古に元氣なく、所謂氣合なるものかゝらざるなり。如何に技術は巧なりとも、氣合なき稽古は何の價值かあらん。武道の主なる目的は、心膽を練るにあり。技は未なり。勝敗固より重んずべしと雖も唯勝を制するに急にして、主を忘れて、心を勝敗の事にのみ馳せ、徒に未技を弄するに至りては、武道の價值は大半消滅に歸するなり。禮儀も武道の最も重んずる所なれ共、一度相手として立て合はんか、先生、親友知人今は仇敵たり。何ぞ遠慮斟酌するに及ばんや。但し相手の老幼に應じて、多少の遠慮斟酌

酌なかるべからず。敵を斃さずんば已まざるの決心を以て精盡き、体疲れ目廻ひて倒るゝに至る迄奮闘せざるべからず。彼の少々の負傷或は苦痛のため、さも痛けに稽古を半ばより已むるが如き、實に意氣地なしなり。弱蟲なり腰抜けなり。何事にもあれ、我慢が第一なり。瘦せ我慢するは大いに可なり。我慢なきものは男子に非ず。如何に痛しくとも、我慢して毫も色に見さざるは男子の本領なり。輕舉喜怒哀樂を色に見はしては臍下三寸の一塊を如何せむ。

七、吾人の意氣

夫れ武道は日本魂保存上唯一無この武器なり。三尺の秋水の下、神色自若毛髮一本も動かさざるは吾人の意氣なり。柔能く剛を制す。現代の大力士太刀山の如きもわが強所を以て、彼が弱所に當らば、彼を斃すに於て何かあらん。泰山前に崩るゝも萬雷後に轟くも、而かも毅然として動せぬは、吾人の本領なり。臍下三寸の一塊は吾人の生命、以て入つては深慮盡策の妙を興へ、以て出ては拔山倒海の猛力を興ふ嗚呼心膽なるかな。

八、吾人の覺悟

吾人心身の鍛鍊を以て誇るの輩須く質朴剛健以て、彼の泰西文明の輸入に伴ふ余毒、華美柔弱の風を撲滅せざるべからず。之れ方今我國に於ける一大強敵、若し吾人にして敗れんか、唯亡國あるのみ。豈に撲滅せずして置くべけんや。

思へ。吾人は徳川封建の世、赤鬼の勇名を天下に轟かせし祖先の血を傳ふるものなることを。不肖の子孫を以て甘んずべきにあらず。況んや不忠不孝の子孫となるをや。一旦緩急あれば義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼せざるべからず。又此の將來世界の英主國たるべき大帝國の運命をその双肩に擔へる、吾人の任亦重且つ大ならずや。思ひ此處に至れば身に餘る大任を負へる光榮に思はず感泣せずんばあらざるなり奮へ!! 金龜城下の健兒!! 練れ心身を!!

以て粉骨碎身君國の爲めに活動する時の資となし、我が日本魂をして益々全世界に光輝あらしめよ。

以上述べし所は、之れ余が現今確信せる持論を、毫も偽飾する所なく吐露せしものなり。然れ共將來余が學識の進歩と、經驗の増加とは、現今の此の持論に多少の變化を及ぼす事なきを保せず。讀者乞ふ幸ひに之れを許されよ。

嗚呼なつかしき此の學庭、過ぎ去りし夢の如き五星霜。今將に親とも戀ひ慕ふ恩師の膝下を離れ、兄弟とも愛する諸君と別れんとす。余素より有情の動物豈一掬の涙なきを得んや。然れども余は敢て笑つて別れん。終りに恩師の健康と諸君の勉學とを祈り、併せて將來の再會を期す、健全なれや健兒!! さらばいざ!! (了)

修養時代の貧苦は寧ろ幸福ならんか?

第五學年乙組

藤本弘治郎

身は山間に生れ僻地に長じ、天稟有爲の才を抱きつゝも貧困の鐵鎖に縛せられ、衣食にのみ急にして空しく藁屋の中に伏し、傾檐破窓の下に無限の暗涙を吞んで草木と共に朽ちなんとする者天下廣くして人衆の多き數ふれば幾何ぞ。

爛々たる眼秀麗なる眉、以て其の俊才を窺ふべく、磊々の言爽颯の姿以て其の氣衆を視るべし。

若しも可憐の聰敏なる者に貨すに資を以てするの慈悲ある富人士あらば、大政治家、大教育家、國家の干城たる可き軍人、冒險事業家も亦その内より蹶起するや必せり。

然れども無慈悲なる富者ありて彼等俊才に一文の費を貸さず、假令希望の光明を前途に認めつゝも一條混沌の濁流を漲らす貧河の爲めに、哀れ一穗の青燈、影はの暗き破屋の下に、彼等をして紅淚潜々たらしむ。加之動もすれば世人貧者を罵つて曰く『彼は貧家の子弟にして狹識淺智無爲無賴の徒輩たるのみ』と。何んぞ貧者を遇するの酷にして貧者を嘲笑するの侮慢なる貧者必しも狹識淺智無爲無賴の徒のみにあらず。彼等は充分なる資力と自由なる教育を受けざるが故に世人の眼には愚なる者の如く映するのみ、知らずや、絶代の巨人豊太閤は貧困より起り赤子四海を統御して尙飽かず、明韓八道四百餘州を震蕩して大名を千古に垂れたるを。蓋世の碩儒荻生徂徠は赤貧洗ふが如く日々の露命をつなぐ能はず。僅かに豆腐の粕を人に乞ひて、漸く飢を凌ぎて孜孜勉勵遂に博覽宏識一世否千世を驚倒せしめたるにあらずや。

賴襄の草廬より起りて、我國史を究め其他西郷翁の如き陸奥伯の如き、西洋にありても田舎の貧家より出で、佛國の主動者となりしロビスピールの如き赤貧より起ちし詩人ボレンスの如き。さては奈翁の如

き數へ來れば枚舉に遑あらず。斯の如く貧者にして偉業を成せるもの多し。其れ歴史の證する所にして我等の喋々を要せざる所なり。西誓の言に「予をして、もし富者ならしめば此の如き算學家となる事を得ざりしならん」と又「嘗て冷かなる衾上に辛酸多き夜を泣いて明せし事なき者は美妙なる靈力を振ふ能はず。」と、その言や宜なり。

蓋し氷雪に曝され炎熱に照され、櫛風沐雨も意にせず晝間の煩勞にて足痛み、腕疲るども、徹夜雪を積み螢を集めて勉強し得るの健康体と強精神とを有するものは貧家の兒童の常態なり。則ち千辛萬難に耐ふる不撓不屈の力を有し進み／＼て止まざるの至誠と風發踴躍の勇とは貧兒の天恵なり。

困苦は志を堅固ならしむるの良師友にして實際辛酸を嘗むれば習慣上遂に困苦を感ぜざるに至り却つて心胸豪壯となり、身体強健となり堅忍不拔となり思想快活となる事は猶適宜なる運動が心身を爽快にし長命者が規律正しき労働者に多きと何ぞ異ならんや。

然して富者の子弟は花に酔ひ月に戯れ錦繡を纏ひ意氣施々として醉生夢死す豈悲しからずや。

飽食暖衣赤貧の眞味を知らざる富人士が妄りに貧者に對して無上嘲笑を以て輕蔑するものは何ぞや。見よ。山を抜くも三尺の兩腕、大洋を壓するも三尺の兩脚にあらざるか。

嗚呼滿天下不幸の赤貧兒諸子、吾人と同じ境遇にある貧諸氏、失意する勿れ、落膽する勿れ、語に曰く『天の將に大任を降さんとするや。先づ其心志を苦しめ先づ其の体を飢す』と。凡そ驚天動地の偉業は大厦高樓に安坐して珍味佳肴に飽き淫逸に耽りたる柔弱漢には成す能はざる所なり。而して茅屋壁落ち垣破れ粗食を食する貧兒よく大業を成就するなり。

有爲なる諸子よ、痴雲如何に苦め、貧河は如何に濁流を漲らすとも、精神一到何事不成の金言を堅守して業務に進むべし。唯業の成否は諸子五尺の体中にあり。撓む勿れ、屈する勿れ、起たんとするものは一步も早く決然として鵬翼を千里に張るべし。

嗚呼貧困は苦痛なり。然れども我等修養時代に於ける青年には寧ろ幸福ならんか。

進んで運を捕ふべし

第二學年甲組 宮 戸 龍 憲

運は天に在り壯丹餅は棚にありと云ふ事があるが、實際運と云ふものが世の中にあるのであらうか、無いのだらうか斯う云ふ事は随分面倒い問題である又分からぬ問題である。分つて仕舞へば運で無くなるのであるから、分らぬから運と云ふのである。併し人智が開けるに従つて、昔は運であつて分らなかつた事物が今日では段々分つて來たと云ふのは事實である。昔の人は随分呑氣であつて分らぬとは皆運の方へ持つて行つて仕舞ふ、今日は天氣だらうと思つて、外へ出たけれども運悪く雨に出合つた、雨が運で、降ると云ふ。是れは天文學なり氣象學と云ふやうな學問の助を得れば昨日臺灣海峽に低氣壓があつたから、何時頃雨が降ると云ふやうなことが分る。學問の開けない時代は雨が降るのも、天氣になるのも運だとして居る。今日では大抵斯う云ふ原因があつて、斯う云ふ結果が出来たのであるといふ事が明らかになつてきたけれども、尙學問の研究では解釋の出来ない問題が残つて居る。それは今日所謂運な

るものである。

運と云ふことに付て今一つ考へねばならぬことは、人間の爲す事は皆自由意志である。斯うしようか、あゝしようかと自分の心を自分できめて行くのである。斯うしたら貧乏になる、あゝしたら金持になるとか、身体が良くなつたり悪くなつたり譽められたり、誹しられたりする。それはどう云ふ譯であるか即ち之を姑く運と云うて置きます。吾々が生れてくるのに等しく金持の家に生れようか、貧乏人に生れようかと判断して生れたのではない。自然ボツト生れたのである。金持なり、貧乏人なり如何して生れたか、運悪く貧乏人に生れた、運よく金持に生れた之を運と云ふのである。故に一体の仕事も矢張り自分の思ふ通りでなくして、他の力に依て左右せられることがあるに違ひない。それで姑く運と云うてゐるのである。この運と云ふことを説明するに付き昔の話に餘程面白い話があるが、説明の順序として一寸諸君に話さうと思ふ。よく彼の落諸家が云ふ所の古武士が、駕籠に乗り箱根山を通りますのに、互に退屈からして、駕籠舁と武士とが、話をしながら段々進んで行つて、武士が言ふには、「お前は幾歳だ。」駕籠舁の言ふには、「もういけませぬ、三十六です。」「お前は三十六か、乃公も三十六歳だ。」「同じ三十六でも、旦那のやうに樂々と駕籠に乗つて御歩きになるが、私のやうに、汗水流して駕籠を舁いで行かなければならぬと言ふのは、同じ三十六歳でも色々違ひますな。」士は「そらそうだ。同じ三十六歳でもお前の三十六と乃公の三十六とは違ふ、お前は宿から宿へ駕籠を擔いで行くから四九三十六である、乃公は祿を載いて生活してゐるから、六六三十六である、」と云つたと云ふ話がある。同じ人間であつても、出來た結果は三十六でも、六六三十六と四九三十六は此の成立の原因が違つて居る、人間として

同じ事であつても幸な人か、不幸な人か、達者な人か、不達者な人か、金持であるか、貧乏人であるかと云ふことは、此處が違ふに相違ない。原因が異ふ之を佛教では因縁と云うて居る、因は原因、縁はそれを助ける所のもの因と云ふ原因が同じ事であつても、縁が變ればものが皆變ると云ふのが佛教で言ふ因縁である、それ故に人間として同じことであつても、縁が變つて居るから皆違ふのである。之は天地間有ゆるものは因と縁とを離れて居るものはない。寄集つて總てのものが出来る。之を因縁生と云ふのである。此處で手を打つて音がする。それは右の手には音を發すべき原因がある、原因は又左手にもある原因と原因とがあつても合すると云ふ縁が加はらなければ、音がするものでない。因と縁と寄つて生ずる因だけではものが出来ない。縁によつて變る山には木がある。其の木はテーブルになり、椅子になるものと區別はない。大工の手なり、指物屋の手に依つて椅子となり、テーブルとなる。其は即ち縁である。故に人間も、矢張り其の因縁によつて生じたるものに違ひない。と云ふのは、佛教の説明である。兎に角、運と云ふものは天地の間に充滿して居るのである誰の手にて捕へんも可なるべきものである。然して之を捕ふると、捕へざるとは、その人その人の考にある事で、人の幸不幸は、亦全く其の人の努力の如何によつて、定まるものと云つてよいのである。或る雜誌に次の如き物語があつた。米國ボストンの片田舎に住んで居たダビッドと云ふ少年があつた。或年ボストンの叔父を頼つて行つて身を立てよう決心した。馬にも乗らず、車にも乗らず歩いて來ると、丁度夏の眞盛りの事とて、何分にも暑くて堪らず、フト木蔭を見つけて、傍に流れてゐた小川の水に渴を醫して後、持つてゐた包を枕に、暫く横になつてゐたが、やがて涼風に心地よい眠に誘はれて、遂にスヤ／＼と寝入つてしまつた。

すると、其の前を種々様々な人が通つて行く。金持の老夫婦が通りかゝつて、ダビッドの罪無き寝顔に見とれて、養子にしたいと云ふやうな相談をするかと思ふと、今度は泥棒が来て、ダビッドを殺す相談を仕合つてゐる、と、丁度折よく人が来て泥棒は周章で、逃げてしまふ。かくしてダビッドが暫く寝てゐる間に實に種々様々な運命が通り過ぎて行くのであつた。されど眠つてゐるダビッドは、そのやうな事があらうとは夢にも氣附かなかつたのである。是と同じく世の中の人の多くは、自分自身の眼前を通り過ぎる運命に對して、殆んど盲目の如くして通つて居るのである。運は全く天に在る。天地間に充滿し吾人が身邊を圍繞して居るのであるが、併しながら、人間多く之を捕ふることをしないのである。此の意味に於て、運は決して廻つて來ぬのではないけれど、不幸に泣いてばかりゐる人は、之を捕へる資格がない。人若し不幸なりと云ふも、其はその罪全く其の人に在つて、運命そのものに何等の惡意あるに非ずである。言語の自由、階級制度の消滅、これ等は、凡て、昔の人達が幾多の犠牲を拂つても、それを求め且つ得られなかつたものである。然るに我々は天與の寶庫に入るが如く、自由には是を享受し、自由を利用し使用し得るのである。實に歴史上如何なる時代を尋ねても、今日程好ましい時代は未だ會てないのである。かゝる世に生れたる我々は、千載一遇の好運兒とも云ふべく、不景氣とか、物價騰貴とか、そんな事位に意氣銷沈して、天地間に充滿せる運を捕へんともせざるは、愚の甚だしきものなりと謂ふべきである、必ず運を捕へ、幸福を取り逃さぬやうにしなければならぬ。



文苑

湖邊のあした

第五學年甲組 小村貞三郎

いたく夜のふけて西に傾く月影、障子越しに明らけく照しつ。さきつ程より起き出で、様々の事物しつるに、早や曉つたふる晨鷄の聲。又一聲。いつしか遙かに聞ゆるに、東雲の程も間近しと、心憂きまま心やりにもとて、柴戸打し開きてぞやおら身を杖一つにまかしつゝ、そこはかどなく逍遙す。

月は早や彼方の山のはに沈まむとして黄金色いど物凄く、彼方此方薄雲棚引くそが中より、撒き散らしたらん如き、ぬか星のかす／＼、伊吹山のかなた、頂の上にきらめく大星一つ。ことに眼に映じてキラ／＼と絶えず光る。夜はますます／＼冷えてあたり淡黒く見渡す限り皆安さうまいの程に静ま

れり。

野犬の長吼え聲もかすかに一しきり。

露を含める綠葉青草、茂り繁れる桐の葉一つそよかぬ淋しさよ。

折から轟く汽車のひびき、今し芹橋の上にさしかゝりしならん、俄に音もはげしかりつるに、やがての程に音も止みて、後は又もとの天地たゞ寂寥蟲の音一つ聞えぬ静けさ。愈々想を馳せながら湖邊さして歩どうつすに、橋のあたり、軒端の街燈ボンヤリと左に右にたゞ狭き路を照しつくる、少さき屋守、楓の四肢、硝子越しに淡黒く影うつせる杖にて打てば鉄力の音ガタ／＼として遁れ去りぬ、可憐なる乎。

家の内には人々皆安らけき睡りにいまだ曉の夢見つらむに、はや氏神の社の森中、あたり沈んで淋しきを、傾く月を惜みてか、微かに調ぶる鴉のなきごゑ。

哀れ／＼淋しき夕、東雲近くなりぬる時は、いつもかく鳴きつるを、暫し聞きていと／＼古への思ひ出となししも幾度ぞや、その主は扱も此社の森に

住みつるか。

よくこそ鳴きつれせめての事に今一度の長鳴もが
など、思へど哀れはや月は西に沈み、東天僅かに
赤らみ初めつるに、あどほと絶えて耳に入らず。
朝靄淡く一面にかゝりて薄煙のごと、遠寺の鐘の
ね、はるけき内より洩れきこゆる中に、小石まじ
りの濱邊づたひ、このもかのもを彷徨ひつゝ、や
がても傍に横ふ松の樹、片はしに腰打かくればホ
ロリと落つる下露一滴、昨日の夕の細雨、名残も
未だ失せやらす。

棧橋の先にかすかなる電燈の影、揺られ揺らるゝ
細波の上に投げ下しつゝ、今し臨終の床に入らむ
として、二度三度明滅のあと暫しが程にフト消え
つ。

湖の面いと静寂なる、言ひがたき一種のインスピ
レーションの胸に浮び湧き出づる沖合には一つい
きの朝霧こめて見渡すかぎり只朦朧、漕ぎゆく船
の影だに見えず、遠く多景島は宛然薄衣に包まれ
たらん如。

近く磯山の岬又かすか。遠く氣高き連山のあたり

海に對して

第四學年甲組 奥井武一

一、追憶

私は幼い時から海が好きであつた。

殊に荒れ狂ふ時、何んとも言へぬ感じがするのである。ぐはぐはぐは……と水平線のあたりから、白い入道雲が湧いて、強い猛烈な日射にかゝり、やきながら、灰色の層をなして盛んに騰つてゐるのを見る時は、小學時代の地理の教科書で見た、涼しさうな南洋の椰子樹の影と、裸体の蠻人が、鋭利な鎗を持つてゐる姿を思ひうかべては、其時のなつかしい追憶にうけるのである。

二、海の聲

海の聲が寄せ返す浪に残つて、死んだやうに静り返つた夜の漁村の何處かに一脈の生氣を持たせてゐる。

永劫不斷の海の聲、我はこゝに永遠の消息を痛切に味ひ得た。若し此の漁村に此の聲が絶えたならば、漁村の生命も絶えたやうなものになるだらう。

五二

白灰色の雲片たなびく。

懸て白帆の一つ、いまも松原港に入らんとす、其の景さも李將軍の筆と雖も及び難かるべし。

見顧れば猶伊吹の山の頂の上、ます／＼少さく輝く綺羅星一つ……。

鳥の鳴く吾妻の方、萬のもの之によりて初めて眼醒むる心地、漸く東の方より明け行くなり。

噫々見せたきは曉の光、未だ曙の榮ある景を見知らぬ人に。

折しも朝風一しきり、細波ます／＼輝き、そよそよと岸邊に打寄する、今迄鬱かりし湖上の眺めも

とはに和らぎ、四方のもの皆その温き光に浴びて一入みどりこく見えぬ。飽さざる南のかた、荒神

の孤峯、頂に止る朝雲一團、そが中より杉の木立影清く黒澄みて見ゆる。雲雀囀つる千々の松原さ

ては東金龜の城、かはらぬ緑いとなつかしく、白き城壁はいや白う。

折からの鐘の音、一つ二つ……六つ直ちに歸路に就く。

う。

終日終夜響く海の聲は、夢中に通ふ自然の脈搏生氣の微動である。

海面には濃い霧が罩めて、その中を立迷ふ海の香が、そよ風の面を撫でる度に鼻をつく。

海の聲は、ます／＼重い調子で脈打つやうに響いてゐる。

三、蒲郡にて

綱引を終つた朝の濱邊は、又元の静かさに反つた。潑刺たる銀魚を胴の間に躍らせて、小舟は市場に。――藻草の着いた敷網を白砂に擴げて、漁夫の一群は家路に向つた。沖はまだ眠つてゐる。

濃い朝靄の中を白帆が夜の如く流れてゐる。松林を縫うて幼女を連れた若い母は、今朝も綱引を見

に來た。日傘を片手に、浴衣の裾を取り乍ら、水沫濕つた砂の上を静かに逍遙してゐるが、やがて藻に絡まれた小魚を見付け出すと、一匹取つて

小さな器に入れた。

手を延して打ち寄せる小波を危く掬ひ込むと、器は幼女の手に渡された。麥稈帽を被つた可愛い

五三

い顔に、微かなほゝ笑みが浮んだとき、彼女の寂しい面にも、何處か晴れやかな色が見えた。

幼女は病氣の身であつた。

四、賛崎で死んだ叔母と海と

砂丘にちいさき墓の一つあり幾世經にけん海原遠し。

けふもまた濱の砂原なが／＼と叔母の足跡つゝくあわれさ。

あか／＼と遠き岬にくれのこる夕日のかげを叔母は見つめつ。

五、淡路にて

黄色い棕櫚の咲く砂丘に蹲つて叔母と従姉と私は心ゆくばかり濃い南の海をみつめた。

青白う瘦せた叔母の指の細さ……。

夕の光が次第に遠ざかつて淡い花の匂が囁り泣く。ふと夢のやうに追分がきこえてくる。

私はじつと目を瞑つた。

六、砂の上

二人は、暖かい皮膚さわりのよい奇麗な砂の上に寝ころんで、遙か沖の果に、怪物の様にむらが

暗き海のくれゆく彼方に……

思ひのよよ

第四學年甲組 岡村五郎

雲行き水流れ、大正五年は昨夜につきて、百八の鐘の響と共に大正六年の春を迎ふ。乾坤未だ新なるに非ず。宇宙必ずしも改まれるに非ず。日は日常の如く東より出で、鳥は空に翔り、犬は地を走る。爰を平日と異なる所なしと雖も、松竹を飾り注連縄の幣、門戸に兒女の嬉々として遊び暮すを見ては、人心自ら新にして萬物悉く生氣を生ずるを思ふぞ可笑し。

『門松は冥途の旅の一里塚』

何の嬉かあらん、何の意義かあらん。而も我等嬉ぶなり。青年少壯殊に然り。空中に洋上に苟も地球に生を受ける者何ぞ幸福を祝福せざるべき。吾等青年過去の自己に飽き足らず、將來に偉大なる抱負に猛進して、青年の修養と進歩とは實に此に萌芽せんとするなり。何ぞ意義なしとせんや。吾

つてゐる雲の峯を見つめた。
廣々とした海は午後日光にキラ／＼光る。見れば見る程奇怪な形をしてゐるあの雲の峯の中には、何物か潜んでゐる様に思はれる。

神戸の街が、青い海と真白い雲の峯との間に、濃くはつきりと浮いてゐる。

時々ビシャ／＼と、柔かい波が胸元へ押しよせて來て、ジューと砂に泌み込む。

私と丁さんとはいつても砂の上に寝ころんで此音を聞きながら雲の峯を見つめた。

七、暗き海に

極しなくほぐらき海に

燃ゆる火を背にのせて

漁船は赤く走れり。

はるかなる港をさして

ひとりたゞ濕の海を

ひた／＼と走りつゝけぬ。

燃る船灰色の空に

赤々と焰をあげて

人は大いに祝福すべし。軍國の青年として激烈たる氣象の最善最高の發展を期せざる可からず。

大將 西郷

大西郷ト南洲翁！余の最も敬慕せる偉人である。

爛々たる巨眼、悠然たる体軀。悲しい哉、彼一時逆賊となり遂に城山の露と消失せたり。

實に公は當時武官最高の位にあり乍ら藩侯の長屋に住み、大君を憚りて元帥を稱せず、功に誇らず粗衣弊食、性行何ぞそれ潔白なる。現今成功せし者は言はずもかな、所謂成金の如き、壯麗なる邸莊を營み、美衣美食に飽き、名利に走り、無爲に閑日月を送る。嗚呼二者思ひ合せて慄然たり。今や浮華の風は漸次彌漫せんとす。慨すべき哉。吾等公の人格を模せざるべからず。

地位なる哉

人は地位を得ざるべからず。地位高ければ小聲も遠く聞け、小形も廣く見ゆ。千尺の山嶺に一寸の小草を植うれば、百尺の大木を下瞰してより高き事十數倍、而も一寸豈百尺より高からんや。只地位を高からしむるのみ。地位を得るそれ便ならず

や。されば夫の無爲に終らんとする者の如きは固より要なし。苟も成すあらんとする青年は先づ地位を得ざるべからず。然して後云はんと欲するを云ふべし。爲さんと欲するを爲すべし。

百尺の大樹も深谷にあれば、人之を俯瞰し一寸の小草も山巔にあれば人之を仰視す。地位低ければ美行も顧みられず、地位高ければ愚言も傾聴せらるべし。地位なる哉、地位なる哉。

らしく

世の中には何々と肩書でも付く様になると、急にヒゲでも生やし、紳士然と氣取る奴輩あり。人を人とも思はぬ振舞をして満足して居るものもある。それ等に限り權門に阿諛し、貴い頭を一言毎にベコ／＼下げてゐる。豈彼等のみならんや。學生は學生らしく、官吏は官吏らしく、百姓は百姓らしくすべきなり。敢て愚見を呈す。

人は機敏

河村瑞軒も車力、一日品川を通りける時、于蘭盆會とて瓜茄子等の捨てられて流れ行くを見、之を拾ひて漬物として賣しに、價安ければ人争ひ買なり。

風呂貰ひ

第四學年乙組 東野 亮

夕飯をすまして、火鉢に手を炙り乍ら、新しく貼り更へた曆を眺めて居ると、遠くから、大きな、しかしはつきりとしなない聲が聞えて来る。

「お風呂がわきましたさかい、何時なつと來と呉れや、——す。」

「お——なに。」

母は、茶碗や皿をしまふ手を休めて、ごなり返してから僕の方をむいて、

「傳ちやんどこに、ほしな湯が沸いたぞ。お前、貰つて來んかえ。」

「ほしな湯つてなまに。」

「干したなつばを風呂に入れてたいたのやがな、それやようぬくとまるさかい、行つて貰つておいで。」

下駄を履いて、かご口をあけてみて驚いた。

ふ。之が爲瑞軒利を得又成功の基となる。又大火と見るや直ちに材木を買ひ占めて、直ちに烙印を附して運び出す。案の如くに火事は東京の大部分を灰燼となし、瑞軒の家又焼失す。

材木商先を争ひて材木を買はんと欲すれども既に多くは瑞軒の所有となりて又手を出すべき所なく瑞軒莫大の利を得。何ぞ他人の機先を制するの速かりし。機敏哉／＼。

不倒翁

棚の達磨鼠の爲に落つ。落ちて轉轍して立つ。小兒面白がりて又投ぐ。又立つ。十數回投げられては立ち、立ちては投げられ、遂に顔面に凸凹生じ腹部破れたり。試みに之を破れば、底一面土にて他は紙なり。底重ければ立つなり。之に於て余は悟りぬ。何人も腹を大にして大膽にネバリ強く萬事を爲すべし。然る時は何事も成らざるものなしと。或事業に取掛り一度蹉跌すれば再び起つ能はざるは人の缺點なり。血氣未だ定まらざる吾等青年學生たるもの、不倒翁を座右に具へ、業務の暇に之を轉がし、而して不撓不屈の精神を養ふべき

今はもう、さ程には降つて居ないけれど、日のくれに戸締りをする頃には、裏の雜木林に、木枯がひう／＼鳴つて、うす闇のなかを、粉な雪が横さまにふりしきつてゐた。それが今までにたいへんたまつてゐる。

今日午すぎ、しばらくの日和に、前の杏子や柿の木の枝の雪は、すっかりなくなつてゐたのに、堀かげの弱々しい細いえにしだの枝の先まで雪がたまつてゐる。圓きわまでも一めんの雪だ。踏み込み路から、畑に到るまで、黒い點も見あたらない。ちら／＼と降る雪を通して、庄平さんの家の灯がぼんやり見える。障子にもたれてちつと眺めて居ると、どこか遠くで、米搗をしてゐる音が、微かに聞える。

「ひごいもんにたまつた。路もふさがつてゐる。やおつかさん。」

「風がすんだと思つてゐたら、そんなにたまつて居たのかえ。土間の隅に藁靴があるさかい。裾が雪にすらん様に氣をつけて行きな。」

傘をさす程でもない。兩手で裾をからげて出かけ

る。月が登つてゐる筈の、ぼんやりした灰色の空から、時々小さな雪が舞ふて來ては、ひいやりと頬にふれて落ちる。歩をはこぶ毎に、藁靴が大きいので、抜け落ちさうで仕方がない。ふみしめると、藁靴の半分ほど雪がくひ込んで、くくく、くくくつと蛙の鳴聲のやうな音がする。彈ぢくやうに雪が小さくこんで、靴のさきに大きな塊がひつつく。雪の重みで、にうつと路のどまん中に、枇杷の枝が垂れ下つてゐるのにつき當りかけて、危くよけて通る。通りすぎてから、二本の指さきで小枝をちよいと揺つて見ると、枝全体の雪が一時にごつと落ちかゝつて來たので、びつくりして抜けさうな藁靴を曳き摺つて深い雪の中を逃げるかど口で、足をふみたゝいて、雪をおとしてから障子をあける。

「今晚は——。」

「あ、あきさんか。よう來ておくなすつた。」

「炬燵がぬくいさかいに、さ、どうぞ。」

とばさんが炬燵からこんで出て、蒲團のはしをボンと叩いて、風呂場へ下りて行く、をつさんは炬

り、ゆらゆらつとゆれては、ばつと廣がつて消えてゐる。窓に「忠」とか「武」とか、一字書の草紙が貼りつけてある。

見覚えのある傳ちやんの手つきだ。

したで藁の音がする。

「おばさん、たいておくれるのか。」

「ちよいとぬるい方にして置いたもんやで。」

しばらくして、

「その開きをしめて、蓋をしなるとようむさりますがナ。」

といふ。手を伸して蝶つがいになつてゐる蓋をして、ひらきをしめる。まつくらだ。

湯のわく音がごど／＼いふ。浮板の隙間から時々あつい湯がこんで上る。湯をませると、しめ切つてあるので大きく響く。手に何やらさわる。柔いものが。

そつとさぐつて見ると、隅に葉の葉が束にしてつけてある。成る程しめ切るとあた／＼かい。湯氣がどちこもつて頭のとつ邊まで湯の中へつかつてゐる様だ。湯の沸く音がだん／＼激しくなつて來て

燵にあたつたり乍ら、手をさしのべ首を引き張つて、大きな老眼鏡をかけて、見にくさうな細い目をして、何やら本を眺めてゐる。早速あた／＼かい炬燵にすり込んで

「傳ちやんは、をつさん。」

と問ふ。をつさんは本を蒲團の上へ伏せる。

「傳はナ、年頭ついでに、ちよいと田母木へ行きよりました。わしもかう寒うては、出るのが雑作でなあし。」

「どまりがけで。」

「たいがいなら、今日歸るといつて出たのやけんど、まだやさかい、たぶん泊るのやろ。雪もたまつたし。」

「あきさん。いつとくはなはれよ。」

をばさんが湯加減をして來て、巾のひろい布前掛で手をふき／＼いふ。

「おつさんは。」

「めつさうもない。さあ。」

湯殿へ行くと、薬臭い變な匂ひがする。うす暗いカンテラから、ごす黒い油煙がす——つと立ちのば

絶え間なく下から熱いのがとび出る。耳が鳴り出す。頭がふらつく。息がつまり相になつて來る。たまらなくなつて、ひらきをおし開けると冷やかな空氣が流れ込んで來るので、思はずは——と大きく息を吸ふ。カンテラがぼんやり笠を被てゐる。漂々とおがる白い湯氣の中に。

風呂から上つて見ると、太市さんが來て炬燵にあたつてゐる。軀中ばかりくけれど、強ひられるまゝにまた炬燵に入る。をつさんは早やざ／＼と湯を使つてゐる。太市さんは、さつき、をつさんがのぞいて居た本を讀んで居たが、突然僕の方を向いて、

「あきさんは何の年でしたナ。酉。猪。」

「酉。」

「ひとつ見てあげやう。」

べら／＼頁を繰つてゐたが、やがて僕の顔を見つめて、につと笑つて、あけたまゝ本を僕に渡す。表紙を見ると大きな入り込んだ印と、藁がめどが朱色に塗つてある中に「大正六年御壽賀」とかいである。ひらかれた其の上には、人が川の端に立

つてゐる粗末な書がかいてあり、下には「二黒水性の人」それから小さな活字で「汝のこゝしの運勢は、この圖の人の如く、旅行中橋なき河にさしかゝりたるが如きものにして、進退に迷ふ秋あるべし。」とか「身の上の人の指圖をまて。」とかその他さまざまのことが書きならべてある。

をばさんは僕に茶を出してから、太市さんに注ぎながら、

「それはほんまによう當らはりますぞ。去年見てもろたら大概間違ひなしやつた。」

「何せ、日本一の學者が、みておかはるのやさかいに。」

太市さんが茶を啜りながら相槌をうつ。僕はもう一度、「二黒水性の人。」の所をよみ返さうと思ふ氣が起つて来る。門口で、下駄の雪をはらふ音がして、障子があく。

「どうぞ一風呂洗はしとくなはれや。」

奥左のつうさんの聲だ。

「ようおいでやす。ふつたるかな、今。」

よく見ると釣し柿だ。黒紫に干からびて、白い粉がいちめんにふいてゐる、甘さうな釣し柿だ。太市さんの湯加減を聞いてから、竈の前に坐つて、茶釜の下を燃やし始めながら、をばさんも、口をもどつかせて一つかちつて居る。

「なあし、つうさん。こんなものさへ碌に噛めん様になつてしもた。かうやつて、だん／＼参らして貰ふのに近づくのやかなあし。」

「さうやくらゐ。お互にうろついてゐるまに、ちき参るのも知らんと、よい氣で暮して居るのは情ないもんや。」

それきり二人は黙つて、口の中でお念佛を唱えてゐる。をつさんは煙管を啣えた口から、煙りをゆるく吹き乍ら、さつきの様な細目で、先日とりつけた五燭の電燈をながめて、

「あきさんら、理窟が分つておいでぢやろが、電氣ちうんもはなか／＼妙なもんやなあ。」

といふ。いかにも感じ入つた様な、不思議に堪えぬ様な調子で。顔つきで。

「どう／＼此の村へも電燈がやつて來たナ。」

「いゝや、星はつて來やはるのが見えかけて來ました。」

をつさんとつうさんが話しながら上つて来る。

「太市さん、今晚は。めづらしくおすなあ、あきさん。」

「や。ごめんやす。」

をつさんは、まつ赤な顔をひからして、きちんと坐つて座敷の方に向いて、手をあはしてをがんで念佛をとなへてゐる。湯から上つてすぐまた炬燵に入つたのが、何だかきまり悪くなつて来る。

「太市さん、あとになつたけんぞ、さ、どうぞ入つてくれ。」

いひつゝ火鉢の側へゐざり寄る。

「では一杯貰ふとせうか。つうさんごめん。」

「さあまあ。」

奥のくらやみの中でごどつかせて居たをばさんが何やらけたいなものを下げて來て、炬燵の上に置く。

「あきさん、鼠をあげやうか。つうさんもあがつておくれやす。」

僕がいふしりから、をばさんが大きな聲でしやべ

る。

「わたし等、電氣なんか夢にも見た事がなかつたに、こんなものを見るときは。やつぱり生きて居ないと、珍らしいのは見られんはな。蓄音機でも。」

つうさんが。

「をつさんのうちなどは、小供が無いのやさかい、やつぱりランプの方が得やろに。」

「さうやけど、あんまり會社から、ひびつて勸めに來よつたもんやで、試しみにちよいと引いて見た。うちの婆はいらんのにどばして置くと、エレキが減るのが勿体ないといふので、寝る前には消してしまふ。」

をつさんがかう言つてはまた電燈を見上げる。みんなが今更の様に電燈を眺める。新しい笠の上に煤が少したまつて居る。

「この間も、傳が電氣の下で、着物をふうわり着やうとしたら、うちの人、それ電氣が消える

ぢあないかと、大聲で怒鳴つたら、傳がびつくりしてとんでのきよつた。

まだなれんもんやでなあ。あはゝゝ。」

「わはははは。」

「ははははは。」

太市さんが、軀中から湯氣を立てゝ上つて来て、いつしよに笑ふ。

「だいぶん賑やかなあ。」

「何やらをかしな事らしい。」

與左のをつさんと共に、母が妹を連れて入つて来る。茶釜から頻りに白い湯氣が、漏れ立つて居る。ばち／＼と柴の燃ゆる音がして、をばさんの顔がばつと明るくかゝやく。

椿

第三學年丙組 木下八郎右衛門

初めてこの漁村に汽船からおりた時、私は實際椿の花の多いのに驚いた。その日は風のひどい正午で、汽船から濱まで解はほんの目と鼻の僅かな間々黒く輝いて居る。

初巳詣で

第二學年乙組 大久保明文

楽しい冬季休暇は来りぬ「煤拂」「餅搗」は終りぬ。殊に今年の「餅搗」は余一人にて殆んど全部を搗きたれば稍々多忙なりしも大元氣にて、大正六年の正月を迎ふる事はなりぬ。年明けたる新禧の元日學校の拜賀式に、出席し歸途は廻禮に行き、年末年始に於ける余の職責は是にて一先づ終りを告げたる譯なり。冬季休暇を利用して、一度徒歩旅行せんと考は休暇前より夙に、余の抱きたる希望たりしなり。平地の徒歩旅行よりは、登山展望せんには、趣味上さては体育上に有益なる事は云ふまでもなく目的なき登山よりは、目的ある登山は同じく登山せんにも趣味上、体育上以外に更に他の意味を包含することゝなり、登山の價値を多く感ぜしむるは、此れ亦云ふまでもなき事なり。三日は今年巳歳の初巳なるにより到る所の辨財天は大

なのに十何分間もかゝつたのであらう、その間眞白な波がしらと渦巻の中にもまれてゐた。濱にあがつてはつかりした氣もちで眩しく四邊を見廻すと例の黒々と光つた葉がぐれに眞赤な花が鈴なりに咲いて其處等中に茂つてゐた。船着場から兼々借りておいた百姓家に行くまで十町あまりの路傍も殆んどこの樹の連續でその百姓家に初めて睡つた翌朝、顔を洗ひに脊戸口の井戸に行つてみるとその井戸を圍んだうす暗い木立も全部この樹であつたのに而かもその花の眞盛りであつた。この實からとる油が土地で一合貳拾錢もするといふからなるほどいゝ副業であらう、のみならずこの樹の幹は漁船のあげ下しに砂の上に布く「シラ」に最も適當なのださうだのである。まる／＼とかたまつて茂つたこの樹がいつも吹く潮の風の儘に身をまげて立つてゐる姿も寧ろ金屬製でもあるかのやうに靜かに且嚴に輝いたこの花も、私には珍らしく懐しかつた。

この花も最早散つて終つた嗚呼。

日ましに強くなつて来る日光に其の葉ばかりは愈

繁盛なるべし。彦根の近郷には、大洞、湖中には竹生島等の辨財天ありと雖、共に徒歩旅行としては或は餘り近く、或は全く不可能なる場所に位す、比叡山は近江第二の高峰にして登山するに餘り高からず、低からず又彦根より山麓に到る距離餘り遠からざるなり、加ふるに無動寺辨財天ありて京津地方より參詣する者多しと聞く。いでや我も登山し、兼ねて初巳詣を爲さんとして家人に辨當を乞ひ我家を出發せしは二日午前七時半なりき。道を東海道線路に沿ひ西すること里又一里、正月の事とて田畝に耕耘する農夫も、草刈る賤女も無し。何れの村里も門飾り衣改めつゝ往き交ふ人も自らいと神々しくぞ見えける。河瀬、能登川をすぎ、八幡にて晝食を終り野洲、守山を飛び越へて左に三上の山を眺め、草津なる知己の家に着せしは夕陽將に沒せんとする頃なりき。床に入りて、

名にし負ふうばが餅搗く草津驛

旅のつかれを草枕せむ。

と一首を詠じて睡りにぞつきける。

翌くる三日朝とく起き旅装を整へ出立す、唐橋に

かゝりけるに勢多川の水いと清ければ、

勢田川のせだえせずして流るゝは

その名と共につきすあらなむ。

粟津ヶ原に義仲の墓を弔ひ大津を経て大津街道を北へと進み、志賀の古き都の事ども偲び出で今は實に、

小波や志賀の都は荒れにしを

むかしながらの山櫻花

てふ名歌を想ひいでて寂寞の感禁する能はず。

唐崎に出でては老松を訪れ其の巨大なる面白き枝振には、一驚を喫したり、今日は初巳とて京津電車、湖南汽船共に大割引を以て乗客運搬に頻りなり。湖南汽船によりて坂本に下船し登山する人々甚だ多く絡繹として絶えず日吉神社に参拜す、官幣大社にして、大己貴命を祀る。壯麗なる神輿あり所謂日吉の神輿にして、其數七個あり、七社の神輿なり、毎年四月十四日を祭日とす。昔延暦寺の僧ども此の神輿を昇ぎつゝ京都に、瞰訴せしこと、たび／＼ありしと聞く。

流石は傳教大師開山の延暦寺の在る所とて、坂本

長濱遠足の記

第一學年丙組 加藤新一郎

ピーツ！と一聲、豊郷驛の汽笛落莫たる朝の静けさを破りぬ。是れや蓋し一番列車なりけん。起つて戸を開けば、世、尙、ほの闇く、千草に叩く蟲の聲の微なるを聞く。

更に天空を望めば、殘月淡々、今や西森に沒せんとす。柱時計のVII時を報するや、身は至極輕装に、辨當肩より斜にし、我が家の門を後に觀、勇を鼓して、轟進する程に、金風蕭颯、肌に逼り、心身共に澄み渡るを覺えしむ。

八時出發、「切通し」の阪路も忽ち駆け過ぎ、街道を北進し、鳥居本に到る。是れ世に名高き合羽の製造地なり。更に中仙道を北に進まんか、涼氣一時に懷に滿ち爽快の氣一時に起る。到る所森林我を送り原野我を迎へて、美妙な。鳥の聲、翻々として花に戯るゝ胡蝶の姿など吾目に觸るゝもの一

そして愉快ならざるはなし。

やがて米原に到らんか、驛舎雄大にして、汽笛轟々、大氣を震ひ、黒烟濛々、滿天に漲り、工業盛都の大空も偲ばる。程經ぬれば、あまの川あり。流潺湲として、清冽の水、白沫を飛ばしつゝ、駛す橋を渡りて、右折し、名も知らぬ二三の村落を打過ぎ北國街道を辿りて、目指す長濱にぞ著きにける。一同欣喜踴躍、手の舞ひ、足の蹈む處を知らず。街路整然、市街活氣に滿ち、剩へ濱祭りの前日とて、老若男女其の裝を凝らし見るからに潔く加ふるに其の敏捷なる舉動に至りては、我が彦根町之に劣れりと云ふべからん。

斯くて、街を右に折れ、左に曲りて、豊公園に著きたるは實に午前十一時なり。

美なる哉！豊公園。巨岩磊々、樹木轟々楓樹あり紅葉赫焉として燃ゆるが如し。

東に巍峨たる雲の峰、漠々として現れ、南に蒼波渺茫たる淡海湖、洋々として、遠く眸を放てば、彦根町の面影髣髴として、雲烟模糊の中に潜めりこの處にて午餐を喫し(零時三十分出發)御坊に詣

解散す。悠々として筑摩神社の前を通り磯山の嶮坂を攀ぢ、起つて彼方を瞰下すれば、脚下は直に大湖水にして、森々たる中に獨り堂々たる雄姿の湖に映するは烏帽子岩なり。而して東南には松原一帯の地を眺め、遙かに金龜城の天守閣、幾々として中空に聳ゆるを、まのあたりに望むべく、東は山間に質朴たる農村の散在せるあり、全くかの四明ヶ嶽の頂に、遠く近畿の地を望み、豪壯の感に打たれしに似て、愉快窮りなし。

かゝる間に餘音嫋々たる晚鐘あたりに起りて、夕陽已に湖上に没し、天光水色と相映じて、金波銀波を漂はし、加ふるに紅葉四方を飾りて其の眺や一入なり。

我は暫し佇みて、この荆關も只ならざる一幅の暮色圖に恍惚たりき。午後五時歸彦。

燈火燦々、星の如く輝ける黒き吾が村に還り著きたるは七時なりき。

づ、堂宇莊嚴、境内の灑掃洗ふが如し。鐘樓あり周圍繞らすに池を以てす。水は清く澄み渡りて、一面鏡を敷くが如く、鯉魚の游泳するは恰も兒童のダンスの如く、二片三片落葉の散り入るも亦趣あり、此處より近道を辿りて八幡神社に謁す。神社は源義家卿の建立に係り、祀るに應神、仲哀の兩帝及神功皇后の三柱を以てす。鳥居をくぐりて身は神社の境内に入りぬ。老樹鬱蒼として晝尚暗く神氣靈域に滿ちて至聖の感身に迫る。歩むともなく歩を進めば一步は一步より崇高の念胸に加はる。先づ著衣の塵打拂ひ、整列して參拜す。精神恍として身の此に在るを覺えず。敬虔の念心裡に湧きて立ち去り難し。

此の處にて長濱比鄰の諸友及び落伍者と袂を分ち畑を辿り、濱を傳ひて歸路に著きぬ。

我等切に渴を感じて四邊の惡水も玲瓏たる玉水の如く觀えていと尊し。辿る湖畔の風光も亦床しく春風秋雨幾千年岸邊を洗ふ小波は今も昔に變る事なく、並木の松は千古の緑を堪えて婀娜たる其風姿を波靜かなる湖上に映す。午後四時の頃ひ一同



韻藻

新体詩

新年

特別會員 村田林次郎

神の定めし

爰に大正

初日さやけく

四海浪風

佳例の數の

空には鶴の

龜も岩津に

君をあふぎの

鄙も都も

飾る常盤の

梅の花さへ

軒にまばゆき

日の本の

六年の

てりさせば

おさまれる

かから船

まひあそび

ひれ伏しつ

末ひろく

おしなべて

松竹に

咲きそへる

日の御旗

御代の榮えを
結ぶ廬に
民のかまどの
見るもふさはし
いはひ廻れる
鼓の音も
子等のさゝめき
實にも目出度き

七五三繩や
烟立ち
賑ひを
福壽草
萬歳の
羽子をうつ
聞ゆなり
事ぞかし

使ひ

第三學年丙組 中村吉治

たらちねのみこと
かしこみうけて
門邊に立ては
吹き來る風に頬は冷やかなり

ハンドル取りて
行く手を見れば
雪雲ひくく

新しき悲しみ

第四學年乙組 北川彌太郎

明けやらで惡魔のごとき暗黒を我うつむきて黙して歩む。
十八の若き心の消えなんと野は黄昏かるゝ鳥飛ぶあり、
教室の冷き空氣身にしみてよこれし靴をながむるぞ悲し。
過ぎし日に語りし室に我行けば赤き電燈煌々として。
黄昏の灯ゆらぐ町はすれ歌ふ乙女の聲ぞ悲しき。
「心あてに折らばや折らむ初霜……」と低き聲にて君は歌ふも。
村雨にそこはかもなき思出に雫と落る我涙かな。
はのはのとしらみゆくなる東の空に飛ふあり二三の鳥。
外套に顔をうづめて我が歩む明けゆく朝の町こそ悲し。
花なれど一枝手折るよしもなし野邊に咲き出づ花にあらねば。

六八

繩手をおほひぬ
吹き募る風は
身をも切るごと
降りしきる粉雪は
背に袖にまつしろなり

ベルの音は凍りて
雪の村は淋しく
野犬たはれて
鳴く聲細し

たらちねのみこと
かしこみうけて
みちを急げば
雪の小路に
あゝ我たいひとり

俳句

第五學年甲組 久米健次

雷 雷あとの雜魚取る川や草深し
大洞の附近にて

案山子 吾汽車に弓引いてゐる案山子かな
某日曜の駈足中

唐辛子 色のみは誰も好くなり唐辛子
柿 柿盗人思はず友を呼びにけり
白き高塚の上柿一つ赤し晝の雨
柿紅葉浮びつ揺れつ流れ行く見ゆ
母の十週忌の夜

秋深し 秋深しラング見つめて母を思ひぬ
枯るゝ葦の水澄みて魚の泳げる
師走十九日試験終えて
長谷川君の一週忌に

寒菊 友の忌に寒菊淋し試験すむ
冬牡丹 冬牡丹思ふ事多きまゝ供へけり
山茶花 友の忌に寒月高し山茶花散る

風呂中

六九

雁 雪

故國の山背皆雪なり雁落つる
髭を剃る鏡に雪の景色かな
百姓吉右衛門に貰ふとて

初鷄

大根に雪つけたまゝ貰ひけり
初鷄の一聲遠き下宿哉
去年の人初鷄さゝぬ賀茂の橋

若水

初鷄に孫の起き出て御慶哉
初鷄や星うす明し窓の春
若水を先づ一番に裏長屋

初日影

午前八時

書初
遠山雪

書初めの反古散らばるや四疊半
鳥二羽一望遠き山の雪
友よりの賀状へ

杉木立寂として遠山の雪月夜
夕陽さす雪の遠山しづかなり
はつ／＼と遠山白し残る雪

即 時

初便
元日

羽子板で受けとる友の初便り
元日の郵便丈來る草屋哉

風の吹くや薄も骨ばかり
枯れ葦や中に耳語く水の音
立秋や馬いななけり里の橋
僧獨り秋の山路をたどりけり

第五學年甲組 松岡源之眞

柿の木や夕日は落ちて山淋し
山寺のくづれし門や秋の月
明月や座つて見ても寝て見ても
破れ寺に非人眠れり秋の月
月の影流れて寒き今朝の川

水仙に有明月の白き哉
木太刀うつ若衆二人や梅の花
春の雪垣根の結目につもりけり
淡雪に少し濡れたる雀哉
春雨にチヨポ／＼と行く雀哉
弟の夢やいづこに春の朝
子は群れて喇叭を吹くや春の野邊

初霞
宿の春
飾
白梅
風

あけぼの、湖上しつかに初霞
宿の春去年の火白き煙草盆
影淋し地蔵の首の飾り繩
梅白し小椽に女梳づる
北風に風まつはれり鶏舎の垣

寒椿
立春

脊の子の後に奴風ひるがへる
空車の毛布にくるまる兒風もてあそぶ
寒椿咲く幹に繪具皿の水かけぬ
春立つ日牧場に小牛を寫生せる
立春の晝閑にして牛眠る
紅梅に風ゆるく吹く今朝の春
今朝の春小荷駄馬の鈴遠き
立春の午後鶏舎の垣結ぶ

第五學年甲組 伊立坂三洲

唯一つ帆船通るや秋の湖
月落らて一際高し蟲の聲
遠足や紅葉の中に乙女子等
燈籠のかげ幽かなり蟲の聲

夢にあげ夢にくれ行く春日哉
暖く又暖く雨のふる
村人の衣正しきまつり哉
行く春に大欠する男哉

夕焼の果なり涼し雲の峯
夕やけや彼岸に鐘の聲わたる
天の川雲へ流れて夜の明し

第五學年乙組 藤本弘治郎

皇國の花咲きにけり菊日和
四海皆歡喜の聲や國の秋
君が代や菊花尊し太子禮
菊の花御代萬歳と祝ふなる
祝砲の響いて秋の空清し
馬で越え七里の湖や磯涼し
行秋を心にしるや桐一葉
日和見て口を開けたる柘榴哉
行秋の芦火も淋し蜚の家